

(西暦) 2022 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

重度認知症高齢者が表出する非言語的サインの特徴
ー絵カードを用いた作業療法場面の観察よりー

学位の種類: 修士 (作業療法学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 21896702

氏名: 金井 千秋

(指導教員名: 小林 法一 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【はじめに】

認知症者の作業ニーズやその背景を明らかにすることは作業療法介入の基本として取り組まれているが、重度認知症者では病態や進行度により面接での聞き取りは困難となる場合が多い。認知症者の作業ニーズを捉えるのに利用されるツールの一つに 70 枚の絵カードで構成された「認知症高齢者の絵カード評価法(以下、APCD)」がある。APCD の使用にあたって、クライアントの語りを聞き出だせない場合には、非言語的なサインを注意深く観察する。しかし、認知症高齢者が表出する非言語的なサインをどのように評価者が読み取っているのか十分に明らかにされておらず、その種類や内容の詳細についても報告はされていない。そこで本研究では、評価者が読み取ることのできる非言語的なサインにはどのようなものがあるのかを分析し、検討することとした。

【目的】

本研究の目的は、APCD 実施中の重度認知症高齢者が表出する非言語的なサインにはどのようなものがあるのかを明らかにすることである。

【方法】

APCD 実施中の様子をアクションカメラで録画し、研究協力者に録画記録の中でみられる対象者の非言語的なサインについての意見を聴取し、その内容のカテゴリー化を行った。

【結果】

分析の結果、頷きやジェスチャー、絵カードへの接触などの【身体動作の変化】、笑顔や目の見開きなどの【表情の変化】、セラピストや絵カードへ視線を向けるなどの【視線の変化】、発話速度や発話量、声質の変化などの【周辺言語の変化】、肯定的な発話や頷き、ジェスチャーによる素早い応答といった【応答のタイミングの変化】の 5 つのカテゴリーにまとまった。

【考察】

本研究の結果と従来から指摘されている重度認知症高齢者の非言語的サインの概念を比較すると、その多くが類似していたが、従来にはない新たなサインとして【応答のタイミングの変化】が生成された。また、【表情の変化】や【視線の変化】でみられる目元を中心とした変化は、本研究の対象者全員に共通して見られたことから、重度認知症高齢者とのコミュニケーションにおいて特に注目すべき非言語的なサインであると考えられた。これらの非言語的なサインの種類や特徴を踏まえることで、APCD は重度認知症高齢者の作業ニーズを捉える手段となる可能性が示唆された。